保育者養成校における音楽表現についての一考察

中 村 浩 美

A study on expression of music in the nursery school

Hiromi NAKAMURA

はじめに

本学紀要第42号と第43号にも記載してはいるが、 まとめとして今年度第45号にも記載する。

それ程までに「幼稚園実習」「保育園実習」「保育者の現場」に必要性があると考えているからである。本学では2年生が受講する「保育と音楽表現」は、幼稚園教諭2種免許と保育士資格を取得するための必修授業である。

この授業は保育者になるために必要不可欠なピアノ奏法・歌唱・弾き歌い・手遊び歌など、子ども達が大好きな音楽を子ども達に指導するために修得するものである。しかしながらピアノ奏法と弾き歌いは、学生にとって実技として最も苦手意識が高く、練習時間も要する教科でもある。

歌唱の場合は、学生達が歌を歌うことに対して ほぼ100%好きである。ただ、自分自身の声にコ ンプレックスを持っていること、声の出し方に不 安や悩み、疑問を解決できず迷っている学生も多 いことは毎年のことである。

授業内容は、ピアノ個人レッスンと手遊び歌・季節の弾き歌い・歌唱法の2種類を前半と後半に分かれて、それぞれ45分ずつ(移動時間もあるため正味40分弱)行っている。2年生全員を3班に分け、1つの班当たり毎年35名~38名程度に分けて、1コマ(90分)当たり17名~18名ずつが前半と後半に分かれての授業としている。ピアノ個人レッスンは各教員の指導室で特別専任教授1名、非常勤教員8名で行い、手遊び歌・季節の弾き歌い・歌唱法は常勤講師1名が音楽あそび室で行っている。音楽あそび室では手遊び歌や歌唱法を交

えた季節の弾き歌いを指導しているため、学生が 保育者になるための意識を高く持って積極的に受 講できるよう、壁面などを飾り模様も付けて保育 室のようなイメージを持てるような工夫もしてい る。ピアノ奏法においては1年生から違う担当教 員に引継ぎを行い、エチュードを始め子ども達が 歌いやすいような伴奏法を高めるための個人レッ スンを行っている。しかし、授業時間があまりに も短く、一人当たりの個人レッスン時間は僅か10 分前後である。ただ前半及び後半の学生割り当て が2人の場合は15分~20分前後はできると言う現 状である。保育者になるために多くの手遊び歌や 弾き歌いの楽曲を、就職先の現場で困ることなく たくさんストックしておく必要性があるため、授 業のみの指導時間が少なく、特に歌唱法や弾き歌 いにおいては放課後や数少ない空き時間を常勤講 師と学生間の都合を合わせてグループや個人指導 を行うことも多い。しかしながら教員も学生もタ イトなスケジュールで余裕がないことも事実であ

音楽領域である「保育と音楽表現」の手遊び歌・歌唱法を交えた季節の弾き歌い、そして6年前より始めた学生自らがグループ活動で作成する世界でただ一つの「手作り手遊び歌」についての授業概要と考察を記載する。

<保育と音楽表現の音楽あそび室における授業内容の概要>

前にも述べたように、授業を行う音楽あそび室 は、保育者になるための意識を高めてイメージを 持てるよう、子ども達が和めるための壁面や飾り をして保育ルームらしい教室にしている。

また、弾き歌いのための歌唱指導において、小さな机付きの折りたたみ簡易椅子の前に、一人1つずつ譜面台を置くようにもしている。これは楽譜を見て下を向かず歌唱法に必要な体の使い方や口の開け方、表情筋の使い方に注意しながら理想的な声に注意して歌えるための方法の一つである。

教室内にはアップライトピアノの他に、本学に 赴任した以前に使用されていたオルガン6台と キーボードを使用できるようにしている。

授業の概要であるが、まず保育者になるための音楽のあり方、つまり保育者になるための意識改革・先生と言う女優になること・歌うことへの喜びや楽しみを感じること・イメージ力の強化・練習方法などをしっかり受け止めて成長していくことの大切さを講義する。

意識改革とは保育者になるために、常に元気な 笑顔ある挨拶、反応や応答をはっきりと行う。い ろんなことに気付き行動に移す。いつも子ども達 が側にいることや曲のイメージを持つこと。人の 前に出ることに対して恥ずかしがらず、立ち姿や 表情にも気をつけて堂々とした態度で先生と言う 女優になりきること。これらのことは殆どの学生 が苦手なことであるため、授業で繰り返し指導し 続けている。2年生に進級して間もなく6月は10 日間の教育実習が始まり、8月9月とトータル20 日間保育園実習、さらに集大成である最後の教育 実習が10月に10日間あり、その間にも就職活動も あり、行き着く暇もなく追われる状況となること を覚悟して、それぞれの課題点を克服していくこ とを担当教員としては日頃より学生の様子を見な がら、授業外でも声をかけて時に厳しく、時に多 いに褒めながら、めりはりをつけながら授業を 行っている。

1. 授業の導入について

授業の進め方として導入はとても大切であることは言うまでもない。この授業に際しては6月に 教育実習が始まるため、羞恥心を無くし先生と言う女優になりきるために、「朝の模擬お集まり会」 を現在も継続している。

この「朝の模擬お集まり会」は子ども達の前で おじけず恥ずかしがらず堂々と話すこと、また子 ども達の言葉や反応をすぐさまキャッチしてそれ を返すことに慣れるための授業の導入である。6 月実習までに全員が「先生役」になれるには時間 がないため、1人ではなく2人や3人一組で出欠 を行っている。「先生役」ではない学生達は、「子 ども役」になって、子どもの心理状況や、子ども ならではのイメージを浮かべながら返答すること としている。出欠を取るにおいて、ただ「子ども 役」の学生の名前を呼ぶのではなく、子ども達が 興味を持てるような工夫ある声掛けで出席を取る。 例えば6月実習は梅雨時期なので、「雨が降るこ とが多くなってきたらどんな生き物が出てくるか な?」と先生役の学生が笑顔で子ども一人ひとり になげかける。そして、子ども役の学生が子ども だったらこんな言葉が出るだろうと、予測しなが ら「かたつむり!」と応えたり、「かえる!」と 応えたり・「紫のお花がある!」と言った一例で はあるが、その子ども達が発する言葉や身体表現 に対して、先生役の学生が子ども役の学生は子ど もだったら何と応えるかをイメージして伝えてみ る。そしてその応えに対して、さらに子どもの応 えたことを受け入れ、それに対しての声賭けもし ながら出欠を取る。終了後にはみんなで「先生役」 はどうだったか、良い点・課題点を話し合うこと を行っている。また、子ども役だった場合、子ど もはどんなイメージを描くのだろう、どんな発想 で伝えるのかを、事例を出しながら発表している。

この「朝の模擬お集まり会」を授業の導入として取り入れることが、学生にどう影響を及ぼしているのかをアンケートに取ってみた。一部ではあるが感想は以下の通りである。

- *この導入は実習の前に役に立ち是非とも続けて 欲しい。
- *子ども達でも人の前に出ることは同じなので、 緊張感が高まり動揺してしまうため、何を話し て良いのか頭が真っ白になるため体験していて 良かった。
- *ただ名前を呼ぶのではなく、子ども達が興味を

持てる内容の工夫や声賭けを常に描いておく必要性を感じた。

- *「子ども役」の返答に対していつも同じ声賭けになってしまい、いろんな声賭けや反応表現を 想定しながら考えておくことが大切であると実 感した。
- *「子ども役」が同級生でもみんなの前に立つこと、話すことはかなりのプレッシャーがあり、 笑顔がこわばり大きな声も出なかった。

以上、ほんの一部の感想ではあるが、今年度でも100%この導入を取り入れた授業で良かったと答えていた。学生個人が自身の良い面・課題面を知ると言う機会、つまり自分を知るという意味でも良かったと考える。

また、指導者としても学生の良い点・課題点・ 積極的・消極的など経過評価をすることができ、 今後も導入として取り入れていくつもりである。

2. 手遊び歌について

4年前より1年生はピアノ個人レッスンのみのため、全員を対象にした授業がなく、「手遊び歌」の指導ができぬまま施設実習に送り出すことになっている。1年生の学生は「こどものうた200選」や図書館で調べ、独自での学習練習では自信がなく指導要望もある。

2年生になると教育実習と保育園実習で、子ども達が大好きな「手遊び歌」はよく使われるため、授業ではなるだけ多くの「手遊び歌」を独自で必要かと思われるものを選び、コピーして学生全員に配布して指導している。「手遊び歌」はパフォーマンスが主流となりがちで、音程が定まらない場合があるが、音楽の一部であるため音程とリズムは正しく、そしてパフォーマンスははっきりとわかりやすいようにと繰り返しの指導が必要である。そのため予習を課題として提示しているのだが、なかなか実践して授業に臨む学生は少ないのが現状である。

短期大学のため、授業がタイトであることや、 時間をかけて登下校している学生も多く、予習な ど授業に関する提出物や取り組み方にもかなりの 問題点が生じてしまうことは事実ではあるが、学 生としての意識を持って何を学び努力するのかを、 考え直して欲しい。

「手遊び歌」での歌いにくく覚えにくい場合や リズムが難しい場合は、子どもがし易い音程やリ ズムに大まかではなく少し変えてみるのは良いと 考えられる。

また、月齢を表示してある「手遊び歌」でも、 その月齢だけにふさわしく使われるのではなく、 未満児でも手や足、頭や頬などを優しく触れて動 かしたりするスキンシップを取りながらでも十分 に使える。その時に正しい音程で歌うことが大切 になってくる。授業だけでの資料(パフォーマン ス付き楽譜)に頼らず、図書館や本屋、現代にお いてはネットでも調べることができるため、たく さんの引き出しを持っていつでも利用できるよう、 自分の宝として保育現場で実用させて欲しい。

「手遊び歌」はどんな時でも使えて、特に子ども達の動向などに困惑した際に助けてくれる一番 のものであると言っても過言ではないと考えら れる。

3. 弾き歌いについて

始どの学生は歌を歌うことが大好きで、授業で 指導した楽曲を授業終了後にも口ずさんでいるこ とが多い。しかし発声においての問題点・課題点 があることで歌う喜びや自信が失せてしまい笑顔 も自然と少なくなるのが現状である。そしてこの 弾き歌いで一番のネックはピアノ伴奏である。歌 うことへのコンプレックスを抱いている学生や、 ピアノ奏法の苦手意識や追いつかず行き詰まる傾 向が大いにある。昨今のピアノレベルではピアノ 経験が殆どない初心者が入学するため、0からの スタートでなかなか指導も難しく時間が足りない。 特に「弾き歌い」の上達には練習の仕方をピアノ 担当教員から指導されていることを素直に忠実に 守り、コツコツと練習を積み重ねることが第一で ある。

歌においては口角から頬にかけての表情筋を アップさせて、笑顔で声のトーンを明るくする。 丹田を意識して共に腰筋や背筋、腹筋を使うこと も言うまでもない。地声からファルセットに移行

しなければ声が思うように出ない学生、ファル セットで統一しないと出ない学生、地声とファル セットを交えたミックスヴォイス、地声で子ども の歌の音域まで出せる学生、と様々であるため、 個人的にレッスンすることが一番である。受講す る学生の人数や授業時間、授業内容を考えると、 授業内で個人的に指導する機会は極わずかであり、 個人的に学生自らがレッスンをして欲しいと言う 傾向は増えている。立って歌うことと座って歌う ことの歌いやすさの違い、つまり立った状態で歌 う体の筋肉の使い方よりも、座った状態で歌う体 の筋肉の使い方の方がより神経を使うこととなる。 ましてやピアノを弾きながらではかなり難しいこ とであり、就職先の現場では時折子どもの様子を 見ながら弾き歌いをすることも必要となってくる ので、学生にとっては苦痛になってしまうのは当 たり前と理解している。

「声」を出すと言うことは体の力を抜き、顔や体の筋肉をどのように使うかで変わってくるが、「歌う」ことの大切さは「言葉」や「イメージ」であると、自らの歌の演奏や学生への指導の仕方で実感している。歌詞の意味を調べて「イメージ」を持つために、その歌の絵を描いて歌詞と言うフレーズの「言葉」を声に出して読むことを必ず行ってから歌うことを指導し、授業内でも勿論そのことを重要視して進めている。学生からもこの経過があって歌うのと、なくて歌うのとでは大げさではなく雲泥の差であるとの意見であった。指導者としても、この経過があってこその「歌」であることを改めて認識し、今後もこのような授業の展開をしたいと考えている。

4. 「手作り手遊び歌」の活動について

「手遊び歌」は子ども達が大好きな保育実技であり、朝のお集まり、絵本の読み聞かせや話を聞く態勢を取らせる時、給食前、晴天・雨天に関わらず教室内で楽しむ時、お帰りの時など、一日の流れの中で様々な時に、様々な「手遊び歌」が保育に活かされて成り立つことも大きい。就職先の現場では勿論、実習先でもたくさん使う必要性があるため、①手遊び歌についての項目で述べてい

るように、月齢やどんな場面で行うのかなどを考慮しながら自分の引き出しを増やすよう指導している。しかし「手遊び歌」は一これでなければいけない一と言う訳ではなく、先ほども述べたようにどんな場面でどれくらいの発達状態であるか、そしてその「手遊び歌」を子ども達が楽しめるかによって行うことが大切であると感じ、そうであれば既製の作品に限らず学生達のオリジナルの「手遊び歌」を作ってみてはどうかと言う発想に至った。題して「手作り手遊び歌」である。

3年程前より後期の授業でグループ活動として 取り組んできたが、最初は学生がどんな所につま ずいて、楽しめるのか、アクティブラーニングと して通用するのか、完成できるのか、発表しあっ て感想・意見を交換できるのかなど不安ではあっ たが、どのような作品ができるのかの楽しみも あった。

授業を進めるに当たってまずは学生に基本中の 基本である楽典の復習をした。楽典と言っても 極々簡単な決まりごと、ト音記号・へ音記号・音 符・リズム・調・拍子・楽譜の簡単な書き方など、 そして1年次で受講したコードについて。驚いた ことに1年次でも読譜、音符の読み方や長さ、書 き方など極々簡単な楽典の授業で学習したはずだ が、殆どの学生が覚えておらず、1からの説明を 行う必要性があった。また、それと同様に1年次 で学んだコードも忘れている学生が殆どで、この 復習も必要となった。オリジナルの「手遊び歌」 が完成するまでには最初の楽典とコードの復習が とても重要であることがわかった。と同時に、完 成するまでにかなり時間を要することも想像でき、 3班に分かれての授業でさらにそれぞれの班で前 半と後半に分けて行うと、各班各前半・後半の1 回当たりの授業時間は45分、ピアノ個人レッスン 室からの移動があるため正味40分程度で、短い時 間帯の中で授業の進め方への工夫は大変であった。

これらのことを踏まえての「手作り手遊び歌」 の完成には、学生達がグループ活動で何を学び、 どんな楽しみや喜び、逆にもがきや苦痛を得たか を知ることができた。ピアノを弾くにはまずは楽 譜を見れることが第一であり、みんなそこから始 めて練習をする。しかしこれが譜面を見るのと 違って譜面を書くのがどれだけ難しいかは当然と 言えば当然である。譜面を読むのは習慣づいては いても、譜面を書くこと、特にしたことがない作 曲をすることは難題であろう。譜面を書くと言う だけでも必要に応じなければしないことであり殆 ど不必要である。それがしかも作曲となれば大変 な苦痛と不安を学生に与えるのではないだろうか。 そのことを察して一人での作業ではなく、4.5人 を1グループにした活動を行うこととした。

「手遊び歌」を授業や実習先でたくさん学び経 験してはきたが、いざ自分達でオリジナルを作る となると、どこから手をつければ良いのか皆目検 討がつかなかったようだ。3年前には題材(題目・ 題名)を教員が予め「朝のお集まり」「絵本の読 み聞かせの前」「帰りの会」に限定して提示し選 択してもらった。調もハ長調のみでコードも必然 的に C·F·G のみとし、拍子は 4分の 4拍子、と同 じように限定して選択しての作業となり、小節も 8小節と短くした。教員が予め提示した形での「手 作り手遊び歌」はなんとはなくの作品となったが、 学生の反応は取りかかりが難しかったが完成させ た達成感を得られたとの感想で、各グループの発 表も楽しんでいた。このように年度を重ねて少し ずつ教員の限定する提示の中身を増やしながら変 えていき、この「手作り手遊び歌」のグループ活 動であるアクティブラーニングを続けてきた。

①【「手作り手遊び歌」を完成するための導入と 説明及び必要事項の指導と伝達】

- *1年次でのコード奏法で学んだ復習コードの種類→C・F・G・C7・F7・G7・D・D7・A・A7・E・B・Cm
- *コードのメージャーとマイナーの仕組み
- *和音の基本型・第一転回型・第二転回型
- *調の説明→ハ長調・ヘ長調・ト長調・ニ長調・ 変ロ長調・イ短調・ハ短調
- *調号を書く順序
- *拍子の種類・意味と拍子打ちの練習
- * 各音符の長さ
- *リズムの種類

- *楽譜は一番左から大切なことが記してあること の確認
- *楽譜の書き方→大譜表・調号・表紙・繰り返 し・復縦線・終止線
- *調が決まってからの始まりの音と終わりの音 の例
- *コードの付け方
- *コードを伴奏形態にする際の例
- *題材(題名・題目)を決めるに当たって
- *「手作り手遊び歌」の作品を完成させるための 手順→

題材決め(題名・題目)、調の決定、拍子の決定、歌詞作り、メロディー作り、パフォーマンス作り、コード付け、伴奏作り

- *小節は8小節~12小節までとする
- *メロディーは子どもが歌い易い音域も加味して 作る
- *歌詞作り、メロディー作りはどちらを先に作る かは作り易い方とする
- *調や拍子を決めて取り組み始めていても、メロディーや歌詞の状況によっては変えて作る
- *グループ(1グループ4.5人)での活動なので、 一人や音楽が得意な人に任せることをせず、一 人ひとりが責任を持ってチームワークを大切に 積極的に取り組むことの指導
- *メロディーが浮かんで五線紙に音符を直接書いて進めるのが苦手な場合は、カタカナで音符の 名前を書いておき、その後正しい音符に直すこ との指導
- *活動のために必要な鍵盤楽器は、授業を行っている音楽あそび室のオルガン(5台)・キーボード・アップライトピアノを使用
- *完成するまでの授業回数は3回とし、発表は4回目とする
- *発表後の提出物と作品の清書の仕方を説明 (教員が準備した用紙に楽曲と歌詞、パフォーマンスを丁寧に清書して、下書きとグループアンケートを含めた3枚を提出)
- *清書した作品においては、授業外の空き時間に グループ代表者が、教員にチェックしてもらう
- *グループ分けをして「手作り手遊び歌」第1回

目の授業までには、宿題として題材を決めておく(2年生全員を3班に分けての各班前半と後半に分けて4グループ 因みに1グループ4.5人)

②【学生の活動内容による指導】

- *「手作り手遊び歌」に授業第1回目ではあるが、 事前にグループ分けと題材を決めておくよう指 示していたため、アップライトピアノ、キーボー ド、オルガン2.3台ですぐに活動が始められた。
- *歌詞から取り組むグループが殆どで、メロディーから取り組むグループは2.3グループしかなかった。
- *取り掛かりやすいハ長調を使うグループが多いため、各グループに取り組み進行中のメロディーを違う調で弾いて聴かせ、どの調が自分達の曲にしっくりいくかを聴き比べる指導をした。その結果、ハ長調よりニ長調の方が合う、または子ども達が歌いやすそう、テンションが上がってくるなど、ハ長調と違う調に変えて取り組み始めたグループが幾つかあった。
- *動物をテーマにしたグループが多く、理由としては子ども達が動物に興味があること、また、「手遊び歌」として可愛いく、動物の鳴き声やしぐさ、体の部位を表現しやすいからと答えていた。
- *浮かんだメロディーを五線譜に音符として書きながら取り組んでいくのが難しいようで、カタカナでソソミラソソファファレレドレミ〜などと言う書き方のグループが多かった。この書き方においては、導入指導で最初から音符を五線紙に書いて進めるのが難しい場合は、カタカナで書いて進めたものを五線紙上の音符に書き換えるよう予め指導していたので問題点としては捉えなかった。しかし、音符をすぐに五線紙に記せないのは、読譜にも弱いことを意味しているため、以前からではあるが読譜の練習強化が大いに必要であることを確認できた。
- *リズム形態が単純で、1年生や2年生で学んでいる「こどものうた200選」や「続こどものうた200選」や「続こどものうた200選」また、図書館で借りられる子どもの

- 歌など、参考にできるリズム形態がたくさんあるのに、参考資料として他の楽譜を見ることを しなかったのは残念である。導入指導の一環と して取り入れる必要性を感じた。
- *ピアノが得意な学生がオルガン、ピアノ、キーボードの椅子に座って弾き始め、他のメンバーが浮かんだメロディーを口ずさんだり、パフォーマンスを考えたりしていた。
- *ピアノが得意な学生が主となって進めているグループもあれば、ピアノは苦手でもアイデアやひらめきが湧く学生が主となりながらピアノは弾ける学生が担当していたグループもあった。
- *一人ひとりが同じ責任を持って活動することが 完成にたどり着くことと指導しているが、グ ループ内で積極的に取り組むことができず、消 極的で外から見ているだけで関われない学生が 目についた場合は、グループ内での協力を重要 視しながら活動するようにと厳しく指導した。 その指導によってか、次の授業での活動には気 持ちを切り替えて少しずつ意見を出し積極的に なろうと努力していた。
- *子ども達とどんな場面で行いたいかのイメージを持って歌詞を作っていた。
- *4分の4拍子が多く、学生は4分の3拍子や8分の6拍子のゆったりとしたパフォーマンスが難しく、子ども達も乗りにくいと思うと話していた。
 - しかし、あるグループの内容を尋ねたところ、4分の4拍子より3拍子に変えることで思い描いているイメージに近くなることと、ラストにリズミカルに終ることでテンポ感の変化ある作品になるのではと指導した。
- *歌詞で悩み、内容も薄く短い曲になっているグループには、どんな場面で使いたい「手遊び歌」なのかを再度話し合うこと。授業で使っている「こどものうた200選」などからリズム形態を参考にして、今取り組んでいる作品から新たな作品を作り上げるよう指導した。
- *既製の「子どもの歌」や「手遊び歌」が耳から離れずなかなか取り掛かれず悩んでいた。鍵盤を使ってたくさんの音の組み合わせを試してみ

てはと指導した。

- *既成の曲を少しだけ入れてみたりしながら、グループ独自の曲を作曲してみてはどうか、とのアドバイスで、メロディーが描きやすくなった。
- *全体的に隣の音、つまり全音上か全音下に進み ながらそれが続いてしまう傾向があった。3度 飛ばしてのメロディー作りには抵抗があったよ うだ。
- *左手の伴奏となるコードが何かを迷って、旋律であるメロディーにある音を根本に、コード和音をさぐっていた。この取り組みは良い傾向で、合う和音が見つかれば基本型の和音に直してコードを思い出す取り組みのヒントを与えた。
- *授業時間内でどんどん進み完成に近くなっているグループと、進み具合が遅く授業時間内ではなかなか先に行かず考え込んでしまうグループとに分かれてしまったが、進度が遅いグループは特に空き時間や休み時間に集まって取り組んでいた。
- *グループ全員で全てを考えている場合、考えやイメージがストップしてしまうことがあったため、そのまま次回の授業に持ち越すのではなく、それぞれに題材に見合った歌詞やメロディーを考えてからそれを持ち寄り、各々のアイデアを組み合わせることも一つの方法と指導した。
- *下書きではあっても、楽譜を書くと言うことに かなりの抵抗があり四苦八苦していた。
- *最初の取り掛かりに手間をとり悩んでいるグループが半分ほどいたが、次第に独自のメロディーが頭に入りパフォーマンスを楽しんでいた。
- *音楽あそび室には全身が見られる大きな鏡があるため、その鏡を利用して、パフォーマンスの 出来具合を確認していた。

③【指導者の目から観た「手作り手遊び歌」のグループ発表】

- *発表授業の前に5分間、仕上げ練習の時間を与 えてから本番発表を始めた。
- *どのグループも笑顔で楽しく発表できていた。
- *自分達で作った作品なので曲においては音程が

- しっかりしており、何を歌っているかもはっきりわかった。
- *パフォーマンスにも工夫が見られて、子ども達が楽しめそうな発表であった。
- *見ている学生も楽しそうで終始笑顔であった。
- *他のグループがどんな「手作り手遊び歌」かに 興味津々であった。
- *お互いのグループ同士で褒めあっていた。
- *発表するグループは、見ている学生に子ども役 になってもらい、発表の「手作り手遊び歌」を 教え伝えることができた。
- *どの班のグループもこれまでにない笑顔で発表 を楽しみ満足していた。

④【学生からの感想・意見】

- *1回40分弱の授業で「手作り手遊び歌」の取り組み・活動時間は短かった。
- *活動時間に余裕があれば、やっと完成した!の 思いではなく、さらに良いものを作りたいと言 う気持ちになれる。
- *授業活動時間に、就職試験が入ってしまいメンバーに迷惑をかけた。
- *世界でたった一つの「手作り手遊び歌」のおも しろさは、発表しあった時に感じられた。
- *取り掛かりが大変であったが、作っていく間に 徐々に楽しくおもしろくなってきた。
- *リズムを五線譜に書くのが難しく、先生に頼ってしまった。
- *五線紙に直接音符を書くのが難しく、階名(ドソミラファレシソ・・・・)で書いて良いとの 先生の言葉に安心した。
- *発表会では、自分達の完成作品を発表することも楽しかったが、他のグループの発表を観たり、一緒にしたりすることがとても楽しかった。この「手作り手遊び歌」の発表は、最後集大成である連弾発表の後にも行うこととしている。他の音楽スタッフである非常勤の先生方にも、是非とも学生達がどれだけ「音楽」と言う原点を見直し復習しながら作り上げたかを、他の先生方からの感想を伺うことで、担当教員が指導した内容や進度の状況、どんなアドバイスの仕

方で曲が浮かんでくるのかを学ばせて頂き、今後どのように活かせるかを、授業研究の一環として計画を立てて行きたいと考えている。

- *他のグループ発表は、学ぶことも多く、新たに チャレンジしたいとも思った。
- *次年度も授業に組み込まれても良いと思う。
- *現場で使いたいと思った。

おわりに

2つの内容を前半と後半に分けて行うこの授業で一番感じることは、とにかく授業時間が足りないと言うことである。今年度は特に足りなく、他校でも同様であると言うことを聞くことがあった。

本学での「実技音楽授業」での前半と後半それ ぞれ45分ずつと言っても、教室の移動時間や教員 が学生に指導する際の区切りの関係も加味されて 時間的な余裕が殆どないのが現状である。

「手作り手遊び歌」は特に授業内のみでは完成・ 発表することはとうてい無理であるため、今年度 も学生の了解を得て、活動してもらうこととなっ た。本授業以外の空き時間や休み時間を考慮した 上、わずかな時間での活動ではあった。

次年度もこの「手作り手遊び歌」の授業を継続する場合は、学生のタイトなスケジュールを考えながら、授業内で完成できる「手作り手遊び歌」のためのコード復習、完成するための作曲と歌詞を交えた工程方法、完成しやすい小節数、何を目的とするかの絞り方を、過去の授業内容・状況・学生の取り組み方や動向、課題点、学生のアンケートを参考に、継続部分と改善部分を参考にしながら研究したいと考えている。

学生には、世界でたった一つの自分達が作った、 手作りの「手遊び歌」の完成過程までの活動や、 完成した時の達成感や喜び楽しみを感じて、改め て保育職に就くのだと言う現実を直視して実践し て欲しいと願う。また、「手遊び歌」を始めとし た保育現場での「音楽」は子どもが笑顔で楽しめ る五領域である「表現」「言葉」「環境」「健康」 「人間関係」にも値することも念頭に入れて欲 しい。

「手作り手遊び歌」に関する達成感初めてあっ

たものの、一方ではもっと歌を歌いたかった。季節の歌のみではなく、いつでも歌える季節にとらわれない曲に時間をかけて歌いたかった。と言う学生からの感想と要望があった。

次年度は「手作り手遊び歌」の授業を行うにしても、前期より後期に入ってからは、季節の曲のみを前期ほど深く取り組む内容にはしなかったため、「歌う」を重視しながら継続できればと計画を立てて行きたい。

現在まで、そして今年度の課題点を謙虚に受け 止め、学生との信頼関係を築きながら授業内容の 研究を今後とも続けて邁進していきたいと考えて いる。